

すな  
砂

やま  
山

みのる  
稔

学位の種類 文学博士  
学位記番号 文第63号  
学位授与年月日 平成2年11月22日  
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 隋唐道教思想史研究

論文審査委員 (主査)

教授 中嶋隆蔵 教授 村上哲見  
教授 寺田隆信

## 論文内容の要旨

本『隋唐道教思想史研究』は「総序」と「第一部」四章、「第二部」十二章からなる。

このうち、「総序」においては、まず、近代以降の日本の道教研究の流れを四期に分けて叙述し、特に、戦後の第三期、第四期の道教研究の、主に魏晋南北朝・隋唐時代の代表的な成果について触れ、合わせて、筆者の道教そのものについての考え方、また、本『隋唐道教思想史研究』の研究の手法について述べた。そして、その後、中国における最近の成果である卿希泰氏の『中国道教思想史綱』第二巻・隋唐五代北宋時期を批評しつつ、道教思想史を研究をせずしては、中国の歴史を全面的には理解できないとしたことであるが、これは、就中、隋唐時代の歴史について、一層、良く該当するであろう。次いで「総序」の最後の部分では、本『隋唐道教思想史研究』の構成と各章の狙いについて叙述している。

さて、本論考は『隋唐道教思想史研究』と題するが、「総序」に続く部分は、「隋唐時代の道教思想」を専ら対象とした第二部と「南北朝以前の道教」を主として対象とした第一部とに分かれる。

この第一部「南北朝以前の道教」は、更に、序章「道教と老子——老子観の変遷と老子注——」、第一章「李弘から寇謙之へ——西暦四・五世紀における宗教的反乱と国家宗教——」、第二章「陶弘景の思想について——その仙道理論を中心に——」、第三章「宇文道の『道教実花序』につい

て——北周武帝の『無上秘要』との関連を通じて——」の四章によって構成される。

序章の「道教と老子——老子観の変遷と老子注——」は、第一節「道教と老子」、第二節「道教と『道德経』」、第三節「道教と老子『道德経』」に分かれ、先秦から隋唐時代に至るまでの老子観の変遷、『道德経』の成立から隋唐時代に至るまでの『道德経』の注釈について、道教との関わりにおいて述べたもので、先人の所説に依るところが多いが、道教と老子と『道德経』とが三位一体的関係を明確にするのは初唐の道教重玄派の成玄英の頃であろうと指摘したのは、筆者の自説を展開した最も顕著なところである。

また、この序章は第一部の第一章、第二章で取り上げる北朝の寇謙之、南朝の陶弘景の出現より前の道教思想の展開について述べ、更には、中国の道教史上、最も盛んに老子に対する信仰の行われた唐代の道教思想の淵源について述べるものともなっている。

第一章の「李弘から寇謙之へ」は、第一節「妖賊李弘の反乱」、第二節「真君思想と李弘教団」、第三節「寇謙之と国家道教」、第四節「新天師道と真君李弘」から成っている。この論考では、最初、『晋書』『魏書』の妖賊李弘の反乱に関する記載例を取り上げ、この宗教的反乱が、当時民間に流行した「真君が当来して民衆を救済する」と云う「真君思想」と関わるものであること、そして、この晋南北朝時代に起こった一種の救世主信仰に基づくものである「真君李弘」の反乱と、その「真君思想」を摂取し、北魏の太武帝を「太平真君」として奉戴した寇謙之の新天師道との関わりについて述べたものであり、そこで解明した中国史上最初の成立道教と云われる新天師道の国家道教としての在り方と民心収攬のメカニズムは唐代道教の存在形態の考察にも役立つものであろう。

第二章の「陶弘景の思想について」は、第一節「伝記」、第二節「詩賦——自適と飛翔——」、第三節「仙道理論」、第四節「仙道の実践」より成っている。これは、茅山派道教の集大成者である梁の陶弘景の文学作品と『真誥』注や『登真隱訣』等の道教関係の著述の考察を通じて、彼の仙道理論を解明したものであるが、その第三節の「仙道理論」の部分では、更にその内部を一「幽明論」、二「尸解論」、三「形神論」、四「応報論」、五「位業論」に分ち、陶弘景が、死を一旦経過したと見せつつ、仙道を獲得すると云う「白日上尸解」の観念を重視したこと等を述べている。この論考は本草などの薬物学に関して、近年、その合理主義的側面が強調されることの多い陶弘景の思想の、実は、神秘主義的側面の看過できない点を強く指摘したものである。そして、この陶弘景の道教思想の考察は、第二部後半の中唐以降の茅山派道教考察の為の本を張ったものともなっている。

第三章の「宇文述の『道教実花序』について」は、第一節「宇文述小伝」、第二節「三教論議の開催」、第三節「北周文人と道教」、第四節「通道観と『無上秘要』」、第五節「『道教実花序』について」の各節に分かれる。この章は、唐の徐堅の『初学記』に引用されながら、従来、注目されることのなかった、北周宗室の文人宇文述の『道教実花序』なる道教サイドに立った散文資料と、北周の武帝の編纂になる浩瀚な道教関係の類書『無上秘要』との関連を通じて、北周の道教の実態を考察することを目的としたものであり、そこでは、北齊の魏収によって編纂された『魏書』の「釈

老志」に叙述される北魏——東魏——北齊系の道教の流れに対する、西魏北周系の道教の流れの解明が意図されているが、同時にそこにおいて解明された、北周の武帝の通道觀の設置と『無上秘要』の編纂という一連の崇道政策は、唐代皇室の崇道政策の先河となるものであろう。

第二部「隋唐時代の道教思想」は、序章「道教と隋唐の歴史・社会——社会各階層と道教、及び道教教団の系譜について——」、第一章「道教重玄派表微——隋・初唐における道教の一系譜——」、第二章「『太玄真一本際経』の思想について——身相・方便・重玄を中心に——」、第三章「『本際経』のテキスト問題について——『本際経』の異称と巻九・巻十の連続問題——」、第四章「成玄英の思想について——重玄と無為を中心として——」、第五章「『靈宝度人経』四注の成立と各注の思想について——『度人経』解釈と重玄派——」、第六章「『海空経』の思想とその著者について——七宝莊嚴・十転の思想と益洲至真觀主黎君碑を中心にして——」、第七章「『虚』の思想——初唐より盛唐に至る道家・道教思想史の一側面——」、第八章「韋応物と道教——真性・『真誥』・劉黄二尊師について——」、第九章「瞿童登仙考——中晩唐の士大夫の茅山派道教——」、第十章「李德裕と道教——茅山派道教の宗師・孫智清との関わりを軸に——」、第十一章「杜光庭の思想について——道德・古今・寰瀛の中で——」の全十二章より構成される。

序章の「道教と隋唐の歴史・社会」は、第一節「国家=皇帝・士大夫・民衆と道教」第二節「道士・道教教団・宗派学派」から成り、道教と隋唐時代の歴史・社会との関係を考察する際、この時代における社会諸階層、即ち、国家=皇帝・士大夫・民衆のそれぞれの階層と道教との関わりを検討すること、及び、道士・道教教団・宗派学派について考えることの二つの視角が有効であると、そうした視角から従来の研究史を回顧し、その展望を述べたもので、第二部の総論としての位置を占めるものである。

第一章から第六章は、隋から初唐にかけての道教の一学派、重玄派について研究であり、この道教重玄派の存在の指摘は筆者の創見になるものである。

第一章「道教重玄派表微」は、第一節「老子解重玄派から道教重玄派へ」、第二章「道教重玄派の成立と太玄派・靈宝派」より成る。そして、第一節「老子解重玄派から道教重玄派へ」は、更に一「『道德真経広聖義』と重玄派」、二「『太玄真一本際経』と重玄派」、三「『玄門大義』『道教義枢』と重玄派」、四「玄疑の『甄正論』と重玄派」に分かれる。この論考では、まず、唐末五代の道士杜光庭の『道德真経広聖義』において、従来の『道德経』解釈者達を五つの流派に分けており、このうちの第四の流派、即ち、『道德真経広聖義』では、「梁朝道士孟智周・臧玄静、隋朝道士諸祿、隋朝道士劉進喜、唐朝道士成玄英・蔡子晃・黄玄蹟・李栄・車玄弼・張恵超・黎元興、みな重玄の道を明かす」と説くこの流派を、かつて藤原高男氏は老子解重玄派と呼ばれていたが、筆者はこの第四の流派に属する人々が、他の場合と相違して、道士ばかりであり、とりわけ、隋、初唐に集中していることに着目し、この老子解重玄派と呼ばれる人々の背景には、道教重玄派とも呼ぶべき存在があるのではないかと仮説を立てた。次に、隋代に成立し、唐代に盛行した『太玄真一本際経』の中の重要な部分で、「重玄」の語が用いられていること、また、隋の『玄門大義』とそれをダイ

ジェストした初唐の孟安排の『道教義枢』にも「重玄」の語が用いられ、更に、初唐の代表的道教教理書である『道教義枢』は『太玄真一本際経』を経証として、数多引用していること、そして、初唐の仏教者玄奘の『甄正論』では、道教側の『太玄真一本際経』等の經典を批判の対象としつつ、道教側の「重玄」教義を揶揄していること等から、隋・初唐の時代に、道教重玄派なる道教の一学派が存在したと結論づけた。因みに、杜光庭の『道德真経広聖義』に見える梁の孟智周・臧玄静等の太玄派は、プロト重玄派とも云うべき存在で、陳の諸糵は或いは在世は隋に及んで『玄門大義』の編集に加わったかも知れぬとし、道教重玄派の成立は隋代と考えたのである。この第一章は、唐代の道教と云えば茅山派道教と言って事足りりとしていた状況の中で、隋から初唐にかけての重玄派道教の存在を指摘し、隋唐道教の研究視角が複眼的になることを求めたものであり、重玄派道教研究の序論ともなっている。

第二章、第三章は、上述の隋代に成立し、唐代に盛行した『太玄真一本際経』の研究である。

このうち、第二章の「『太玄真一本際経』の思想について」は、第一節「著者及びテキストについて」、第二節「『本際経』の思想」から成り、そこでは、この『本際経』は、「元始天尊が、身相を説き、方便の門を啓いて、重玄の趣に入らせることによって、衆生を度脱救済する」と説くことを全体の構想とする道教經典であることを指摘し、その「身相」「方便」「重玄」の諸概念を手掛りに、その中心思想を解明しているが、また、その「結語」の部分では、後漢の時代に成立した道教は、魏晉南北時代を通じて陸続として道教經典を生み出し、南北朝の末には、その道教經典の多様な貌は、北周の『無上秘要』に具体的に明示されるに至っている、しかしながら、これらの經典の説く道教教理の余りに多岐な状況は、自ずから道教徒にその帰一するところを模索せしめる訳であり、そのような状況を踏まえて、隋代において、在来の道教經典の多様な説相を方便と見て、「重玄」という帰一する方向を示そうとしたのが、この『本際経』であったと述べ、重玄派道教成立の背景の一端を明らかにしている。

第三章の「『本際経』のテキスト問題について」は、第一節「問題提起」、第二節「『本際経』各卷の異称」、第三節「『靈宝度人経变』と『本際経』」、第四節「『本際経』十卷の纏まりに関して」から成り、『本際経』の異称と、初唐の書家褚遂良の『靈宝度人経变』の題字をもとに、『本際経』卷九・卷十の連続問題について主として論じ、敦煌本『太上道本通微妙経卷第十』なる尾題を持つ卷子を『本際経』卷十に充てるべきであるとの従来の重要な見解を補強する、『本際経』十卷研究の土台となる文献批判を行なった。この二つの章は、隋唐道教の最も典型的な經典である『太玄真一本際経』研究の基礎を築こうとした作業である。

第四章の「成玄英の思想について」は、第一節「成玄英略伝及びその著述」、第二節「成玄英の思想」から成り、第二節は更に、一「重玄と無為」、1「重玄と妙本」2「無為と理教」、二「本迹の論理に寄せて」、三「成玄英の道教思想と『道教義枢』」とに分かれる。この章は、重玄派道教の代表的道士である成玄英の思想を「重玄」と「無為」の概念を中心に考察したものであり、そこでは、成玄英にとって、「重玄」とは、何よりも道教修行者が究極的に到達すべき、至深至遠の、有

無に滞着することなく、滞不滞に滞ることのない、つまりは、何物にも執われない内面的な悟入の状態、と云う意義を担っていたことを指摘したが、これは道教重玄派の道士の通有の「重玄」の概念の最も精密な説明ともなっている。また、本章で解明した成玄英の思想世界において重要な意味をもって使用される「重玄」「妙本」「無為」「自然」「道德」「境智」「理教」「本迹」「動寂」「空（無）有」「精神気」は、いずれも唐代道教を理解する上での重要概念であること、及び、本章で指摘される成玄英の思想と、上述の唐代道教に冠たる教理書『道教義枢』との強い連関は特に記憶されるべきであろう。

第五章「『靈寶度人經』四注の成立と各注の思想について」は、第一節「『靈寶度人經』四注の各書の成年時代」、第二節「『靈寶度人經』の構成と文章」、第三節「『靈寶度人經』四注の内容」から成り、第三節は、更に「四注それぞれの特色」、二「四注相互の比較」、1「元始、靈寶、無量度人について」、2「大梵——氣と理について——」、3「三元、三官、三徒（塗）、五苦八難について」、4「三十二天説と三十六天説について」に分かれる。この章は、道教の代表的な經典である『靈寶度人經』の古注釈、即ち、六朝から唐代までの代表的な注釈である、南斉の嚴東注、及び唐の李少微・成玄英・薛幽棲の四注に関して、重玄派の成玄英の注釈が李少微の注釈を疏解したものであること等、その四注の成立の先後を定め、四注それぞれの特色を述べ、且つ、「元始」「靈寶」「無量度人」「大梵」「三元」「三官」「三徒（塗）」「五苦八難」「三十二天」説、「三十六天」説等に関して、四注の各解釈を比較し、重玄派の成玄英の説を道教教理史の中に定位づけることを目的として書かれたものである。

第六章の「『解空經』の思想とその著者について」は、第一節「『海空經』の中の特色ある思想」、第二節「益洲至真觀主黎君碑」、第三節「十転の思想と『賈奕天經』」から成り、第一節は、更に、一「七宝莊嚴の思想」、二「『靈寶經』の尊重」、三「一乘平等の思想」、四「道性思想」に分かれる。この章は、『本際經』と共に重玄派道教の代表的經典である『太上一乗海空智藏經』に関して、その著者の一人である黎元興について、その経歴と卒年を明らかにして、『海空經』の成立年代の下限を定め、特に、その七宝莊嚴の思想、十転の思想について自説を展開し、また、筆者が『賈奕天經』と名づけた『海空經』の佚文に「重玄」の語の見える事実を指摘し、合わせて、盛唐の玄宗時代における道教重玄派の思想の転換の消息について述べたものである。

第一章から第六章に亘るこの道教重玄派に関する研究は、初唐の仏道論衡の檜舞台で活躍した道士達の中心思想は何か、『本際經』などに見える猛烈な仏教思想の摂取に際して、道教側のアイデンティティを支えた思想は何か、唐朝皇室の老子信仰を道教教団の内部で支えたのはどのような勢力か、隋唐時代の『靈寶經』の流行を支えた道教集団は何か、そして、何よりも、道教教理の整備に隋から初唐において決定的に重要な役割を支えた道教集団は何か、そして、如何なる学派であるのか、等々の問題に解決を与えるべく行われたものである。

さて、第七章の「『虚』の思想」は、第一節「『虚通』と『虚極』」、第二節「『虚極妙本』について」、第三節「『虚心』」、第四節「『虚——神——氣——形』」より成る。この章は、今回新たに発

表する論考で、各節の題からも明白なように、「虚通」、「虚極」、「妙本」、「虚極妙本」、「虚心」、「虚——神——気——形」等、「虚」の思想を基軸に、玄宗の『道德経』の注疏を間に挟んだ、初唐の重玄派の成玄英・李荣から、盛唐・中唐の茅山派の司馬承禎・呉筠への理論家の道士の思想の展開と、『西昇経』の「虚無章」に見える「虚無、自然を生じ、自然、道を生ず」等の「虚」の思想の影響を考察したものであり、第一章から第六章に亘る重玄派道教研究と、第八章から第十章に亘る茅山派道教研究の橋渡しともなっている。

第八章から第十章は、道士ならざる士大夫と道教との関わりの考察を通じて、従来、余り語られることのなかった中・晩唐の茅山派道教の社会への影響の問題を検討したものである。

第八章の「葦応物と道教」は、第一節「真性と白玉」、第二節「『神農書』と『真誥』」、第三節「劉黄二尊師」から成る。この章は、中唐の代表的な自然詩人として知られる葦応物と道教との関わりを、彼の詩と梁の陶弘景の編纂した茅山派道教の聖典『真誥』との影響関係を中心に考察したものであり、そこでは、葦応物の「学仙」二首の詩が、『真誥』の「甄命授」に見える劉偉道の学仙の事跡と周君三兄弟の好道の事跡に関する叙述を本にしていること等が述べられている。

第九章の「瞿童登仙考」は、第八章から第十章までの三章のメインとなる論考であり、それは、第一節「符載の『黄仙師瞿童記』」、第二節「閻察の入道と劉禹錫の『遊桃源』詩」、第三節「温造の『瞿童述』と『江淮異人録』」、第四節「李徳裕の詩と民間の伝聞」から成る。この章では、武陵の道観、桃源桃花観の道士黄洞元の瞿童、即ち瞿柏庭が、大暦8年(773)5月27日に、この道観において、衆人環視の中に、白日、登仙したとされる事跡に関して、まず、符載の『黄仙師瞿童記』に記録するところを検討し、次いで、閻察が「桃源に黄君・瞿童の事あるを相い聞き、甘心して(黄洞元に)学ぶを請う」たこと、そして、これが閻察が道士になるきっかけとなったこと、また、中・晩唐の著名な文人である劉禹錫が、朗州に流された折、桃花観を訪れ、「黄先生」に事えた「瞿氏の子」の白日登仙の事を道士より聞き、その迫真性により心神の惕れたことを『遊桃源』詩に書き記しているが、この「黄先生」の弟子の「瞿氏の子」は、瞿柏庭に他ならないことを指摘している。そして、更に、温造の『瞿童述』では、桃源で一旦、別れた黄洞元と瞿柏庭が、茅山で再会する話を載せるが、これは、黄洞元が桃源桃花観から廬山を経て、茅山に入り宗師となった事跡との関わりで付加されたと指摘し、また、中・晩唐の政治家であり、且つ文人である李徳裕の詩とその自注によれば、李徳裕の時代の茅山の道士はすべて黄洞元の流れを汲むものであると書き記され、更に晩唐の廬子の『逸史』では、瞿柏庭の登仙そのものが茅山のこととされているが、この誤伝は、かえって、瞿柏庭が「茅山」の黄洞元の弟子であると強調されたことから生じたく謂わば茅山の宗師黄洞元の影響力の深刻さを示すものであると指摘した。このように、第九章では、瞿柏庭の登仙譚の流伝を追いつつ、また、一方で、従来、余り明らかにされて居なかった茅山派の宗師、黄洞元の事跡を解明し、瞿洞登仙譚の変遷の意義を考えたのである。

第十章の「李徳裕と道教」は、第一節「茅山真隱孫智清」、第二節「李徳裕と孫智清」、第三節「茅山での伝法・受法」、第四節「李徳裕と会昌時代の道教」から成る。この章では、まず、王師簡の

『下泊宮三茅君素像記』の記述によって、前述の黄洞元の弟子である孫智清が、元和九年（814）には、茅山で道士として活躍していたこと、また、大和年間（827～835）から史乗にその友誼が明らかでない李徳裕と孫智清は、実は、長慶四年（824）頃より交渉を持ち、李徳裕の「茅山の孫錬師に寄す」「遙かに茅山県の孫尊師を傷む」「尊師は是れ桃源黄先生の伝法の弟子なり、常に尊師の先師の靈迹を称するを見る、今、重ねて此の詩を賦し、兼ねて寄せて黄先生の旧館に題す」等の詩により、会昌2・3年（842～843）の孫智清の仙化まで、李徳裕が孫智清に対し、茅山の真隠として、変わらぬ尊敬を抱いていたこと等を明らかにした。そして、李徳裕は茅山の伝法の宗師孫智清より受法し、「上清玄都大洞三景弟子」なる道号を受けていたことに強いプライドを持っていたと見られることを指摘し、李徳裕と道教との関わりを考察しつつ、茅山派の宗師孫智清の事跡を考察し、当時の茅山派道教の状況を解明した。

唐代道教の主流は茅山派道教であると言う場合、その茅山派道教の中核は、茅山派の宗師の宗教活動であろう。しかし、在来は、特に、その中唐以降の茅山派道教の宗師の宗教活動についての研究が不十分であり、元の劉大彬の『茅山志』に見られる宗師の系譜、例えば、そこでは、第十四代李含光——第十五代黄洞元——第十六代孫智清とされるが、唐代の資料に基づき黄洞元や孫智清の宗教活動の状況の解明をすることによってその系譜の信憑性を確認する作業は甚だ不十分であった。第八章から第十章の研究は、その欠落の一端を補うべく執筆されたものであり、同時に、そこでの道士ならざる士大夫と道教とに関わりについての考察は、第一部第三章の宇文述等北周文人と道教との関わりについての考察と同じ問題意識に立つものであって、それは、第二部の第一章から第七章までが、主として思想的考察であるのに対して、道教の社会への影響を士大夫の動き、あるいはその文学作品を通して把握する歴史的考察の色彩の強いものとなっている。

第十一章の「杜光庭の思想について」は、第一節「杜光庭の伝記と著作」、第二節「杜光庭の思想」、第三節「司馬承禎との関わりと杜光庭の道統意識」より成り、第二節は更に、一「道及び理身理国について」、1「道、妙本、重玄について」、2「理身理国、佐国度人について」、二「道蔵の綱格と道教の歴史に関して」、1「道蔵の綱格に関する思想」、2「道教の歴史に関する思想」に細分され、第三節は、更に、一「司馬承禎との関わり」、二「杜光庭の道統意識」に分かれる。この章では、唐末五代の碩学道士杜光庭の思想について、「理家理国」「佐国度人」の語に象徴されるような「国を経（おさ）め、生あるものを濟（すく）う」と言う考え方が、彼の思想の中心になっていること、また、彼は、隋から初唐における道教重玄派の思想の影響を受けていることを指摘し、合わせて、彼の道教教団における道統意識——それは、彼の道統を、盛唐の茅山派の宗師司馬承禎に結びつけながら、唐代後半の黄洞元——孫智清等とは異なる道統に属するとする意識——を把握して、唐代後半の茅山派道教を始めとする道教の歴史解明の手掛かりを得ることを目指した。また、この第十一章は、第二部第一章から第六章の道教重玄派研究の纏めとなるばかりでなく、杜光庭の『道德真経広聖義』が唐代までの中国における老子信仰の、謂わば集大成である点から第一部序章の「道教と老子」の叙述と呼応する結びともなっている。

隋唐時代、就中、唐代は、文字通り、道教の黄金時代であった。この時代は、道士だけでなく、皇帝や官僚にしてインテリゲンチヤであった士大夫や、更に一般の庶民に至までが、或いは茅山の廬山等の名山の洞天で、或いは長安や洛陽を始めとする全国津々浦々の都市の道観で神仙を憧憬し、長生不死の見果てぬ夢を追ったのである。

以上、本『隋唐道教思想史研究』は、この隋唐時代の道教思想の歴史を、道教教団内部の宗派・学派の展開を軸に、道教教理史の展開、道士の思想、道教經典に対する注釈の思想を跡づけることによって解明することを目指したものである。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、中国史を全面的に理解するには道教思想の究明が不可欠であるとの自覚に立つ論者が、道教が最も盛んに行なわれてきた時代でありながら、必ずしも研究が十分ではなかった隋唐時代を中心に、それが形成されつつあった南北朝時代も含めて、道教思想の史的展開や諸相を考察したものである。

論文は、「総序」「第一部 南北朝以前の道教」「第二部 隋唐時代の道教思想」のあわせて十七章から構成される。論者は、先学の諸成果を縦横に活用しつつ独自の資料調査を精力的に展開して、先学が示した従来の見解を確認、支持し、あるいは疑問、否定するに有力な証拠を提示し、更には零細な資料を強靱な思索で補って果敢に創建を表明している。当該分野に対する認識の部分的な補正や全体的な視角転換の主張は本論文の内容を充実したものにしている。

「総序」において、論者は、まず、日本における道教研究の歴史を四期に分けることを提案し、第四期の現在は、文献学的研究や歴史的研究に加えて現実の中国に対する実際的関心に支えられた研究や広い地域の中での比較研究が進められるなど、道教研究は活況を呈していると認定した上で、それにも拘らず道教最盛期の唐代に関しては、鳥瞰する专著が無く、本論文が最初の試みであると宣言する。なお、既に中国では卿希泰氏編『中国道教思想史綱』が刊行され、第二巻が隋唐五代北宋時期を扱って本論文と内容が交錯することについては、卿著の問題意識や処理方法に共感し同意しつつも、しかし、卿著は一人の論著ではなく、又、隋唐期の道教思想の究明には考察を欠かせない『本際経』『道教義枢』『雲笈七籤』などに関する研究も欠けていて、それらを詳細に論ずる本論文とは大きく隔たると断じ、本論文の独自の価値を主張する。

「第一部 南北朝以前の道教」は、形成期における道教思想の諸相を、四章を設けて考察する。

序章「道教と老子——老子観の変遷と老子注」は、老子信仰が盛行した唐代道教の思想的淵源を論じたもので、論者は、先学の諸成果に拠って、先秦から隋唐までの老子観の変遷を辿り、『道德経』注釈の変遷を道教との関わりにおいて説きつつ、道教と老子と『道德経』とが三位一体とされるようになるのは、高宗朝の重玄派道士成玄英の頃からだ、と指摘する。



第一章「李弘から寇謙之へ」は、晋南北朝時代に頻発した妖賊李弘の反乱と北魏寇謙之の創唱した新天師道とを比較し、救世主信仰としての「真君」思想について、その性格が民衆救済から民心収攬へと変わり、民間信仰から国家道教へと転換していく、その過程や仕組みを論じたものである。民衆支配の貫徹を目論む国家権力と王政の下で救済を願う民衆という二極対立の階級観を鮮明にした論者の行論はまことに明快である。

第二章「陶弘景の思想について」は、茅山派道教の集大成者とされる梁の道士陶弘景について、その仙道理論を中心に論じたものである。論者は、陶弘景の仙道理論を具体的に紹介した上で、その特色として、守一や服薬や誦経によって昇仙を実現するという易行道の主張や、忠孝を説き積善余慶、積悪余殃を説く儒家的家族主義的応報論の立場があると指摘している。また、死を一旦経過したと見せつつ仙道を獲得するという「白日上尸解」観念には、本草学に窺われる合理主義的側面とは異質な神秘主義的側面が認められると指摘している。

第三章「宇文逌の『道教実花序』について」は、唐の徐堅編『初学記』に収められた宇文逌の「道教実花序」という一文に注目し、これが『魏書』積老志と『隋書』経籍志の間であって、北周士大夫層の道教理解を窺う貴重な資料であることを強調し、これの詳細な疏釈を試み、更に同時代の『无上秘要』と比較対照して、北周朝の道教信仰の実態を論じたものである。北周武帝の下で編纂された『无上秘要』では、建国の理念である復古、清儉、済民の思想と道教教義の核心とが一致するという観点から、民衆統治に役立つ道教教義の整理統合が図られているが、「道教実花序」も大筋同一の立場にある、と論じている。

「第二部 随隋唐時代の道教思想」は、隋唐時代における道教思想の展開を論じたもので、重玄派と茅山派に焦点を絞り、十二章を設けて考察する。

序書「道教と隋唐の歴史・社会」で、論者は、この時期の道教を歴史と社会の中で全体的に把握するには、社会の各階層がそれぞれ道教とどう関わりあっていたのかを個別に検討する必要があり、また、道士、教団、宗教といった諸側面から仔細に検討する必要がある、と強調する。当然の指摘とはいえ、閑却されがちな視点であるだけに貴重な確認である。

第一章「道教重玄派表徴」は、初唐に盛んな道教の学派は、従来考えられていたような茅山派ではなく、重玄派であることを論じたもので、論者がその独創性を自負する論考である。既に先学が、重玄を明かす立場から『道德経』を解釈する人々がいるとの杜光庭の指摘を踏まえて“老子解重玄派”とか“重玄派”という学派の存在を考え、その立場の基本的思想を考察しているのだが、論者は、これらを踏まえつつ、更に、隋に成立し唐に盛行した『太玄真一本際経』や初唐の道教教理学の精粹とも言うべき『道教義枢』に「重玄」という語彙が頻出することを指摘し、重玄の思想は、『道德経』解釈の範囲を超えた、より大きな広がりの中で受容されていたもので、道教重玄派の存在を積極的に承認すべきだと提言する。

第二章「『太玄真一本際経』の思想について」と第三章「『本際経』のテキスト問題について」において、論者は、『本論経』は本来十巻のまとまりを確認できるとして二段階成立説を退け、その

上で、この經典は、元始天尊が衆生に対して、身相を説き方便門を啓いて重玄の妙趣に入らせ、衆生を度脱救済することを説くものであり、この經が、従来の多種多様な説相を方便だと定めて重玄の教えに帰一させようとするのは、それまで不統一の状態にある道教教理を統一しようとする目的があるからだと論ずる。ちなみに、この經が本来十巻のまとまりがあることを論ずるに当たり、『太上道本通微妙經卷第十』の尾題をもつ文章が、『本際經』の巻十だと推測した作業は、論者の鋭い臭覚と精力的な調査の跡を示すものである。

第四章「成玄英の思想について」と第五章「『靈寶度人經』四注の成立と各注の思想について」とは、論者の所謂重玄派の中心人物成玄英の思想を論ずるものである。第四章では、成玄英の「重玄」と「無為」の思想を、諸概念の検討を通じて明らかにしつつ、その思想が、唐代道教教理学の精粹たる『道教義樞』と深く関わり、彼が用いる諸概念が唐代道教を理解する際の鍵であることを論じている。第五章では、道教を代表する經典の一つ『靈寶度人經』四注を検討し、嚴東、李少微、成玄英、薛幽棲それぞれの注の先後を確定し、各注それぞれの特色を考えつつ、成玄英注の位置づけを考察したものである。

第六章「『海空經』の思想とその著者について」は、論者が、『本際經』とともに重玄派の代表的經典とみなす『太上一乗海空智藏經』について、その著者黎興の略歴と没年を明かにして經典成立の下限を定め、また經典に説かれる数多くの教説の中から、“七宝莊嚴の思想”“靈寶經尊重の思想”“一乗平等の思想”“道性思想”“十転の思想”を主たる教説としてとりあげて概説し、あわせて『海空經』の佚文と見られる文書に「重玄」の語が見えることを指摘しつつ、玄宗時代における重玄派の思想的転換が、この經典によって窺われることを論じたものである。

第七章「『虚』の思想」は、「虚極抄本」を中心思想とする玄宗の『道德經』注疏を間に挟んで、それに先行する成玄英の「虚通」、李栄の「虚極」、後を承ける司馬承禎の「虚心」、呉筠の「虚」の思想をとりあげ、唐代道教における「虚」の思想の変遷を辿り、重玄派から茅山非へと道教の主流が推移することを論じている。第一章から第六章まで重玄派について論究し、第八章から第十章まで茅山非について考察する。両者の橋渡しの役割を本章は意図しているのであろう。

第八章「韋応物と道教」第九章「瞿童登仙考」第十章「李徳裕と道教」の三章は、士大夫層と道教との関わりを中心に論じたもので、零細な資料に依拠しつつ中晩唐期の茅山派道教が社会に与えた影響を具体的事実の上から確認しようとしている。

第十一章「杜光庭の思想について」で、論者は、唐末五代の道士杜光庭は、司馬承禎に連なる茅山派の道士とはいふものの、その間の師承は、『茅山志』に言う李含光、黄洞元、孫智清という系譜ではなく、薛李昌、田良逸、馮惟良、応夷節という系譜で考えられていること、また、重玄の思想を重視しつつ理家理国、佐国度人を中心とした理論を提示していること、その主著『道德真経広聖義』には、唐代道教の諸思想が流入帰一していることを論じている。

以上、全十七章から成る本論文は、隋唐時代の道教思想について、その源泉を形成期の晋南北朝において考え、その本流を重玄派と茅山派とが交代融合する隋唐時代において究めようとするもの

である。諸先学の成果を集大成しつつ、独自の調査検討をふまえた新しい知見を数多く提示した本論文は、類書がほとんど見受けられぬ現在、独自の存在価値を持つものである。もとより、救世主信仰の性格、『本際経』成立の事情、『海空経』の重玄思想、成玄英と『本際経』の関係など、なお一層の検討が求められる箇所も無いわけではないが、しかし、論者の提言のおおむねは、従来の知見に修正補充を促し、また、全体的把握について視角転換を問いかけるものであり、当該分野の研究に寄与するところ少なからざるものがある。

よって、本論文の提出者は、文学博士の学位を授与されるに充分の資格があると認定される。